ます。実に多彩な、そして実に膨大な仕事をした異才でした。の重要な場面の数々に居合わせ、関わった人であることが知られとしても、美術史、工芸史、また文学史に照らすなら、その時々五泉町(現・五泉市)に生まれました。いま彼の名は忘れられつつある明治三十一年(八九八)七月二日、式場隆三郎は新潟県中蒲原郡

らったころとからこうと手のできるこの最にない目での多言等でて、編書は二百冊に近く、二日十八時間の執筆を自らに課すことも精神科医としての医業の傍らで、生涯に手掛けた著書・訳書・



思われた程です。 を覚えました。式場隆三郎の業績をトー あったといいます。その仕事の大きさと幅広さ、知友の多士済々に、私たちはほとんど当惑 - タルに提示する展覧会は、到底不可能であると

の書名に求めました。可視(科学)と不可視(芸術)の両極を往還した特異な個性の、光学的 明してはいないのです。「註一」 括から程遠いことはもとより、そもそも式場隆三郎自身、この奇妙なタイトルの由来を説 と言いたいような速度と横断性に似つかわしいと考えたわけでしたが、こうした引用は総 「脳室反射鏡」という本展の副題は、棟方志功の手で豪奢に装われた随筆集(昭和+四年)

過ぎません。本展の構成が、必ずしも時系列の年代記ではなく、主題別によるアンソロジー という思いに結ばれています。[誰2] 性と横断性、にわかには要約し難い存在であることが、かえって強調される結果となれば、 となっていることも、式場隆三郎という人物の諸断面・諸断片を通じて、その事績の多様 つまり私たちは、式場隆三郎による謎めいた文字に、自らの当惑や驚きを投影したに

ました。大衆の趣味と教養の系譜というものを考えるなら、現在の私たちの芸術観(例えば 清展などの事業を手掛けた式場隆三郎の活動は、広く時代に導かれ、広く時代を導き 「天才/狂気」「制作/宿命」「芸術/生活」といった観念連合)も、式場隆三郎の仕事に、何らかの由来を ゴッホ伝・民藝運動・精神医学など多岐にわたって健筆を揮い、ゴッホ複製画展や山下

尋ね得るかもしれません。

の故に異貌へと転じてしまり、ということさえ起こるかもしれないのです。 式場の仕事を知るにつけ、私たちが良く通じているはずの文化ないし社会が、その親しみ ブリック・イメージの共有は、明らかに式場隆三郎の広範な仕事が機縁となったものです。 たと知る時、私たちは深く揺さぶられます。たとえば、ゴッホをめぐる「炎の画家」というパ 誰にとっても当たり前のことに、ある時代と社会に画された歴史的起点と高揚があっ

うな問いが、本展のテーマであるとは言えるかもしれません。 れるようなものなのでしょうか。この、とても曖昧なようでも、ずいぶん個別的でもあるよ したら、それは何らかの歴史的背景、もっと言えば、ある個人の仕事によって条件付けら もし私たちが、何らかの初志、もしくは初期衝動というものを、幅広く共有していると

れることを確信するからです。この名と共に始まったものは、今も始まり得るのです。 きほぐし、一見なだらかに見える歴史の風景を、起伏や屈折に富んだ行程へと媒介してく い、というに尽きています。式場隆三郎の存在が、既知であったはずのものを未知の方へと解 しかし結局のところ、私たちの願いは、式場隆三郎という名を改めて思い起して頂きた

保ジャパン、日本テレビ放送網、関係各位に厚く御礼を申し上げます。 画に御理解と御協力を惜しまれなかった方々、御協賛を頂いたライオン、大日本印刷、損 式場隆史氏(医療法人式場病院院長、式場隆三郎孫)、医療法人式場病院をはじめ、私たちの企

の文字の強い喚起力の、雄弁な例証を示しています。「註1」しかし、本書序文において式場隆史氏は、この題名をめぐる鮮やかなパラフレーズを通じて、この五つ「註1」しかし、本書序文において式場隆史氏は、この題名をめぐる鮮やかなパラフレーズを通じて、この五つ

基礎にある、関心、先入観、情動などを内省的に解釈する機会を与えるということである」(同書、三三頁)はでいるでしょう。「説明モデルというパラダイムのもうひとつの側面は、それが、臨床医自身の説明モデルのいうかたちに再構成する私たちの仕事も、「説明モデル」の分析と反省という、クラインマンが論じた循環的いうかたちに再構成する私たちの仕事も、「説明モデル」の分析と反省という、クラインマンが論じた循環的いうかたちに再構成する私たちの仕事も、「説明モデル」の分析と反省という、クラインマンが論じた循環的いるがなる臨床人類学」(江口重幸・五木田紳・上野豪志訳、誠信書房、一九九六年)の中で、臨床医と人類学者とめぐる臨床人類学」(江口重幸・五木田紳・上野豪志訳、誠信書房、一九九六年)の中で、臨床医と人類学者とめぐる臨床人類学」(江口重幸・五木田紳・上野豪志訳、誠信書房、一九九六年)の中で、臨床医と人類学者と

主催者

....002

期の終わり	、研究。40	調査030	ン讃仰026	校の白樺青年	の人々0-2	っと 基 で イ で 大場隆三郎の青年期	
						0	

●草間彌生デビュー **⑤**[裸の大将]とともに…………。988 ◎「炎の人」の誕生…… ❸サド侯爵と三島由紀夫… ❷敗戦国日本…………… ●患者と子供…………… 宿命と藝術美術と文学をめぐる仕事 106

●民藝と生活… 生活と藝術雅俗をまたいで…………

6イット解剖学144	のゴッホ工芸140	「三十月門」をと
7		

式場隆三郎の晩年:

ト隆三郎と式場清前山裕司236場隆三郎と山下清あるいは	復製美術の振興と「ゴッホ工芸」の製作山田真理子220場コレクションによる「ゴッホ展」の周縁	的」「民芸」的なるもの松岡剛200天亭からみる、式場隆三郎の	場隆三郎の書物と生活喜夛孝臣190	期『アダム』を中心に藤井素彦170場隆三郎と白樺派	
	0				

[表見返し]=式場隆三郎「普及版派」同書、社、一九三九年四月 「脳室反射鏡」表 - 装画(部分) 高見澤木版 「紙室反射鏡」表 - 装画(部分) 高見澤木版

介(装幀)『ファン・ホッホの生涯と精神病』上・裏見返し遊び]=式場隆三郎(著)、芹沢銈装画(部分))遊び]=棟方志功、同書、見返し

会、「九三九年六月 広告 「月刊民藝」第1巻第三号、日本民藝協 「東亜薬化学研究所「シキバブレノン」

塚隆三郎旧蔵) 帯・式場肖像写真]=原本すべて個人蔵(式 -出典]=式場隆三郎[序]『腦室

式場隆三郎著作目録(九四一九六五)………259 式場隆二郎年譜………式場隆三郎、式場俊三…………248

式場隆三郎記事一覧(稿)………266

270

腦室反射鏡 四三郎



自身も気に入っていることばです。云わんとするところまで考えたことはありませんで 五冊目の随筆集のタイトルです。隆三郎の造語であり、以前から随分洒落ているなと私 したが、これもご縁ですので少し頭をひねってみました。 今回の展覧会のタイトル「腦室反射鏡」は昭和十四年(カカリカ)に刊行された隆三郎の

です。難しいのが「反射鏡」です。これはそのまま「鏡」の意味で捉えることもできますし、 鏡」をこのよりに解釈してみよりと思います。すなわち、人間みなに共通して備わる 対して意識とは無関係に起きる反応」とシンプルに生物学的な意味で捉えたいと思います。 多様に解釈ができるうえ、それ以上に深淵な内容を暗示している気配がします。 富士山の美、北條民雄のこと、それぞれの内容に連関は全くありませんが、「腦室反射 みました。 書かれているのは、愛書趣味、、映画療法 、、昭和の大横綱 「双葉山」のこと、 「反射」と「鏡」とを分けて考えることもできます。更に「反射」は物理学的、生物学的、 |鏡||はこれらを多面的に映し出す「心」と。 腦室」は「普遍性」、自分の意志とは無関係に起こる「反射」は制御不可能な「現実」、 しかし、ここでは暗中模索はやめ、とっさに(反射的に)思い浮かんだという理由で、「刺激に こうしたことを念頭におき、同タイトルが付けられた五篇のエッセイを改めて読んで まず「腦室」は簡単で、脳や脊髄を保護する脳脊髄液が産生される脳内の腔のこと

な^反射、作用をもたらすでしょうか。な^ていることは間違いありません。さて、本展はあなたにどん本展は、機知に富んだ斬新かつ多義的な巨大な「装置」と



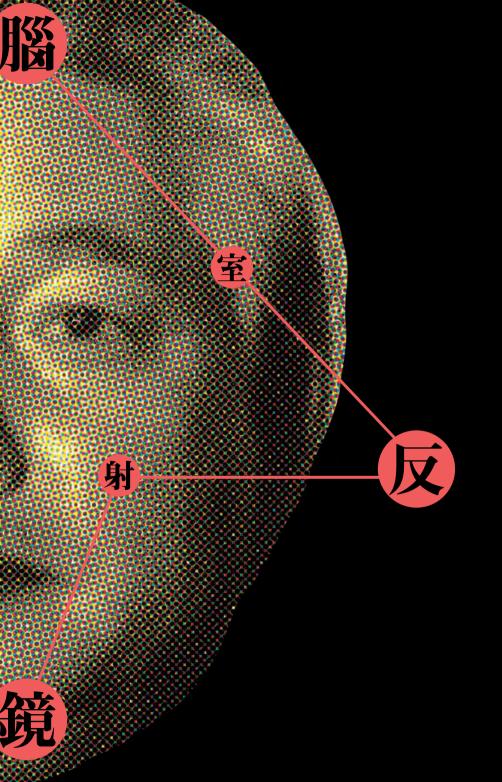
- ●本書は、『式場隆三郎 [脳室反射鏡]』展の図録として刊行される。
- ●出品内容は会場ごとに若干の異同がある。本書の内容は、展示の内容・順番と必ずしも一致しておらず、●出品内容は会場ごとに若干の異同がある。本書の内容は、展示の内容・順番と必ずしも一致しておらず、
- 後半に収録する論考においては、執筆者個別の判断に基づき、表記の統一が図られていないところもある。●用字は、人名や団体名など固有名詞の慣例的な表記を除き、原則として新字体を用いた。ただし、本書



本書では、これを全て正字に統一した。本来の書誌や典拠とは表記が異なる場合も少なくないが、煩雑を避け、一々注記していない。 少なくない。十三回忌の記念出版『式場隆三郎 めぐりあい(人や物や)』[註2]さえも同様で、タイトルも本文も全て「隆」と表記されている。

- ●図版番号でなく、「◆」に始まるキャプションは参考図版に対応する。
- ●年代は、昭和二十年(1九四五)以前は原則として和暦と西暦を併記する。 九四六年以降は西暦のみ記す場合もある。
- ●作品ならびに資料のデータは、「作者・著者・編者」「作品名・資料名」「年代」「秦材・形状」「寸法」「所蔵者」の順に記した。寸法の単位はセンチメー トル、記載はタテ×ヨコの順とし、立体の各部寸法は「々注記した。図書の判型や寸法は表記を統「していない
- ●解説文中の参照文献のうち、目次・索引から参照個所が明らかな短文等については、書誌から頁数の表記を省略する場合がある
- ●本書の図版や引用文中などには、今日では不適切な字句が散見されるが、その歴史的背景に鑑み、修正は加えていない
- ●山田真理子氏(医療法人式場病院)には、セクションB4「『炎の人」の誕生』」の出品資料の選択、同セクション中のコラムと解説の寄稿など.
- に各作品・資料の解説は、執筆者を明記しない場合、藤井が文責を負うものである. ●本書の構成・編集は、藤井素彦(新潟市新津美術館学芸員)が担当し、上池仁子(新潟市美術館学芸員)が補佐した。なお、各セクションならび

[註2] 式場俊三編 『式場隆三郎 めぐりあい (人や物や) 』 (私家版、発行者・式場聴、一九七七年十一月。限定 | 千部とあって比較的希少な一冊であるが、式場隆三郎に関する甚[註1] 式場隆三郎 「陽春漫筆」「藝術時代』第二号、藝術時代社、昭和二年(1九二七)五月、二頁、神奈川近代文学館蔵。



正しきものの前にはおのづさ道が開ける。同志の人々が立返ふ そして一方科學を學ぶと共に、純なる感情を育てし行きたい にあこがれてゐる。 になつて精神の問題に努めたい。我々は常に見えないあるもの の人々が、 立して他の部に對 知れずこつく働かられない。その上離なり 養情と のでは、名音がこさな考へたら、不平が頂く 雑誌部に や名町の記事を集めるのが主で、人 、より深く内的に進んで行きたい。 心の部のアテンダントでふく、 **7澤山あるさ信する。** くれるやうに望む。 それであて吐き出す所のない 、活躍していくさ思ふ。 我々は真劔

を創刊、新潟市内で泰西美術複製展覧会や、 篤·柳宗悦·岸田劉生らの知遇を得る。 大正八 式場隆

二郎は、新潟医学専門学校

(現・新潟大学医学部) 実篤や宗悦の講演会などを開き、新しき村新 年(元元)同級の吉田璋也らと同人誌『アダム』 での医学生時代に白樺派に傾倒、武者小路実

さらにゴッホの精神病理学的な研究に手を 境に育まれた若き式場隆三郎の原点をみる。 染める。当時の資料を通じ、 喰仏の全国調査に協力、民藝運動にも同伴し、 大正期の文化環

潟支部を名乗った。更に式場は、宗悦による木

できた、というのである。「註」式場幸平 で父・幸平が村松中学校の校長に懇 隆三郎は、同年四月創立の新潟県立 四年(1九二)に尋常小学校を卒業した ころだった、という話がある。明治四十 「この父にして」と思わせる一冊である。 骨董品の買い物も楽しんだようで、 は行く先々で旧友や教え子を訪ね、 り、隆三郎が編集にあたっている。幸平 還暦を記念した伊勢参りの記録であ 平の著書『静亭旅日記』(昭和二年)は、 域の敬愛を集める教養人であった。幸 出身で、長く小学校の教員を務め、地 は新潟師範学校(現·新潟大学教育学部) 願し、特別の試験を受けさせることが て受験の機会を逃してしまった。そこ への進学を志望するが、期日を間違え 村松 中学校(現・新潟県立村松高等学校) 式場隆三郎は、中学に入り損ねると

三編『式場隆三郎 版、発行者・式場聰、一九七七年、三三頁) [註]林栄太郎「中学時代の式場隆三郎君」 (式場俊 めぐりあい(人や物や)』(私家



郎」と名付けてやっている。[註2]麻青の新潟県立新潟中学校

新潟市會津八二書·画] 蘭図・同心之言 大正~昭和初期 紙本墨書、墨画・軸装 紅本墨書、墨画・軸装

新潟市會津八二記念館 昭和6年(1931)晚末 昭和6年(1931)晚末

31)晚春

同じ言葉を書き、お互いに贈ったもの。 式場麻青と會津八一が

蘭のよりに香り高い。易経の一節

心通う友の言葉は、

「同心の言は、その臭い蘭の如し」



専門校に遊学し高田先生の厄介になつた」縁による。題字は参謀総長・鈴木荘六は、式場幸平が二十二歳のころ「無分別にも窃かに養家を抜け出で、東都早稲田を一書にまとめるにあたり、早稲田大学総長・高田早苗より「題歌」を得る。これ るから其処に発表して後の旅行者の参考にしては如何」[書と勧めたという。連載が見て自分の文学上の友人たる中村和作君が新潟週報という新聞を発行してあ 旅行とでも云ふ事だ」と洒落ている。「はしがき」によれば、「[旅の記録を]倅の隆 ともに越後の人、大将は幸平の新潟師範での同窓であった。 大将、「題画」は前京都工芸高等学校長・鶴巻鶴|博士。鈴木大将と鶴巻博 式場幸平は還暦記念の旅行に妻々こを「看護婦兼会計係として」同伴、「マア旧

近代文学館蔵)を参照。 術時代社、昭和二年五月、 春漫筆」(『藝術時代』第二号、藝 三郎は名の通り三男であったが 隆三郎自身は、この改名に気が乗 省いて「タカシ」と呼んだ。 なって以来、祖父や父は「三郎」を 長男と次男の早世によって嗣子と [註]ここで幸平が隆三郎を「隆」 るのは理由がある。 しかし

◆(左)母·式場タニ(1)

新潟県立図書館新潟週報社、昭和2年(1927)年6月新潟週報社、昭和2年(1927)年6月前寺亭旅日記』扉

かつ自らの号「麻青」「摩星樓」と同様に名をもじって、「榴散 から号をねだられ、彼の家に柘榴の樹が多かったことを捉え、 式場隆總(たかふさ、六代幸八二八五四~一九二二)と母スツ(二八五九~ 麻青・式場益平(八八二~一九三三)は、隆三郎の母々この弟。父・ 人。[註1] 甥・隆三郎に文学の道を示した最初の人であった。甥 ^{一九三三)}の長男。二松学舎に学んだ国文学者であり、能筆の歌 年(1927)年興「静亭旅日記」新潟週報社年(1927)頃



物評を示す。「それだけ私には厚かつた」と。 性分」と、狷介さで恐れられた八|自らの身を切るような人 て、自らいやしくもしない代りに、みだりに人にも許さない方の る。没後の追想「麻青居士」(『夕刊ニイガタ』昭和二十二年四月 青に時に細やかな助言を与え、時に率直な心境を吐露してい で、およそ三十五年にわたって八一との親交は続いた。八一は麻 たようである。[註4] もっとも、それが隆三郎の力になったかど 田中学校で教鞭を執っていた八一に、叔父として色々と相談し 年(1九1六)に隆三郎が進学準備のために上京する折には、早稲 (現・新潟県立新潟高等学校)の二年先輩が會津八一。[註3] 「日)[註6]には、「〔麻青は〕少し気持の険しく狭いところがあつ かは分からない。[註5] 麻青が逝去する昭和八年(1九三三)ま 大正五

◆[右]式場麻青、昭和5年(1930)、図版出典「剪燈残筆 式場益平遺歌集]私家版·

年記念展,「早稲田大学會津八,「記念博物館、2001年◆「左, 6章津八, 年級三郎撮影, 昭和10年(1935) 7月、図版出典「會津八, 1年記)、日本は清平、1981年

子息・式場壽平氏が私家版として編集・発行した『剪燈残筆 [註1] 『摩星樓歌帖抄』 (雄文堂、大正十三年八月、国立国会図書館デジタルコレク 新資料付注 · 會津八一書簡集 · 式場益平宛書簡」(笠間書院、一九六八年)があり、ン)が生前唯一の著作。没後の出版に、八一の麻青宛書簡二六九通を集めた和泉久子 と「良寛をめぐりて 式場麻青遺稿』(一九九二年)の二冊もあ 式場益平遺歌集』(1九 る。展覧会図録

来、筆名を用いる気が失せたと館蔵)、ならびに「ペンネームと 館蔵)、ならびに「ベンネームと実名」(「デイ・ルーム」第二号、式場病院(デイ・ルーム)発行、「九五七年三月、国立国会図書館蔵)を参照した。白樺派を知って以[註2]式場が若き日に用いた号「榴散郎」の由来を語る記事として、式場隆三郎「陽春漫筆」(「藝術時代」第二号、藝術時代社、昭和二年五月、神奈川近代文学「芝蘭の交わり(八」と麻青の書画」(新潟市會津八一記念館、二〇1七年)も参照した。

[註3] ただし、旧制新潟中学の同窓生名簿に式場益平の名は見当たらない。

〜「八)に中央大学で講師を務め、学内の中央高等予備校でも教えていた。「中央高等予備校学則」(大正七年一月、中央大学のWEBサイト に英語を教わる」とある。中学時代の隆三郎は漱石に私淑しており、その門下の講義となれば魅力を感じたことであろう。鈴木三重吉は大正二年 内「デジタルアーカイ

ちになった、ともいう。「摩星樓歌帖抄」(四六頁)から、八「に捧げられた歌を「首のみ写す。「日盛りは物かげもなきいり海のしゞま淋しき真日のかゞやき」[註6]「會津八「全集」第七巻(中央公論社、「九八二年)に再録。「摩星樓歌帖抄」を手にして、八「は最初の句集「南京新唱」(大正十三年十二月)をまとめる気持ブズ」「下のセクション「開学当初から旧制時代の学則、規則類」を参照。https://www.chuo-u.ac.jp/aboutus/history/history_06/fegulations/







称青层土 面田おすい 得三、郷軍で教育会提を長くつ [.b] 二十五年吧一一日

風機能能抄」といいものを買つけ を描きがたい思がした。 で、しばらくぶりで、ほんとに独 その人も飲も、私には飜が練いの のもとも、やはりそこにあつた。 標頭の「礫壁」は、本名の「マス 人。可感発上といふ人の職集で、 つた。これは、私の友人で五見の くイ」のもおりで、別号の「脳響」 て、置つて帰つて、一と膀胱み耽 先日宮町の宮金属の明から「庫

川、東京へ出て鉄道で鳴らして一 徳の時に、私より二年下で、良 式場着に、私が新潟中学の生

お隣々たる小年女皇者であつた「塗郷してある様子を見て、小林存 誌の同人で、その頃は、いつれ 卒業の幾年新潟で出した同人難のやうな形をしてあたので、きち 私が帰贈田へ入業のために上、君などは、全津神社の神主にと将 んと概念にいて、ていねいに私に もいつてゐるが、玄場君などは、 私には駅の勢子が無いと、いつ 先づ凡例衣腕がと、その一項に 間を乞はれた。それを変取って、 期る多し。常に新して今日に友人の余に新郷田汀を戦ぎし

ない方の性分であったから、いつ であらう。それだけ私には駆かつ も孤高独行で、除方が少かつたの て、わざしそれを持つて上京し た。この歌集なども原稿をまとめ て、私のところへ死て、験職に授 もないわけだ。そんな概むづかし わざ主数元かけて印刷でする必要 育いて、大は見をしたあで くするのはつきらねじやないか。 いことを云つて、自分で世間を無 と私は主告終と玄祭園春の節など

ると、にはかに、そこへ

支援

離を貼れてが選くまで回して

の あわてながら、これが素情熱で 部へ出て、折から海道に当つて、 宮田に属のこうでみた次の子 なった。主能は

心治療をしま

方では君を極ててゐはしない。私の 朗三駆デ、多病ニシテ敬人能ン 斯とうことにいいまだったのは 「おお着れなるの「帰郷南山ラ していますと さうい
ふ
独の方で
私
定様で
て
の けれどものの中に「京本オニシテ

方から批問を奏でてかかるのは、云つたのだ。けれども、かういるないじゃないか。と私は云つたのだ。けれども、かうい で撃ててもあないのに、自分の所といいでないですれば、致々のて、盂織がに追いて大いに恥るをすけ数年を以てすれば、致々のて、盂織がに追いて大いに恥るをすけ数年を以てすれば、致々の るのでないかとあとで特へ込ん とさへ、いくらか私の影響があ

あるなものだ。」から云ばれ」といいことを、云うてやったら、 くなうで、最初がしていけない 結合でを手などの最くなつ 恋たといるし、またある時は、も は、どかの地方新聞に、夏目派 ろは、御もつともでもおらうだ、 た後のアララギ版の歌は、笠つは 石の批評をしたものを、減石へ送 を持つて**居り、**関位思ひさつたこ 高麗氏からの逐瘍に、只会の占こ ちろん面瞰もない、海豚茂吉氏のと り長い手紙で、いひわけを云つて つてやつたら、あちらから、かな とき、したり云うたりしたものち 面には相当に高い島賊と、意味込 ころへ、生紙を与って、どうる子 しい。ある時気に云つたところで こんだ風の人であったから、一

断して御目にかけるといふろうな いものであつたにちがひない。 などころに試験を持たせてある 助者のやうな領側の人に、どこ 大家に男子人をして、それを自 何にもいくいが、その間に、何か、にほかこそれを取り立てて であるから、実際のとうで、ど 人参りのところでの。ただの値段単なりが見せたのでなく。二 しかしこれは私にその三些なけ スルーといってつが得る 何の取得もないもうな人にいく ものだといへる。今日では新潮 かもったにはあったのであらう ものと見なけ にも見当らぬ。そして「腸ヲ廖 在まにして高い機を出して質び から、あいてが今日の顔に氏で 公籍度のりら て、それを自爆にしたけ 会与て死たとい ればならぬから

(八|自身によるスクラップ・ブックより。写真提供・新潟市會津八|記念館)

◆會津八|「麻青居土」「夕刊ニイガタ」1947年4月1日、2日

献青居士 香中八一

つてある。それを私は、ひそかに

味つてゐるのである。たとへば

着望の野をひた社会宗殿の見よ

小さてよさにおけ春

生に二

てあられたのであらうが、式場君 あつても無くても、模が飲治家肌 野で、何とか小物悪の融通がつか 立てるのではないが、帰題なら帰 も、私に決して式場君を縮幅に見 耳を貸するのでもない。といって いふことに、唐が皆、いつまでも いかに高な多類でも、その類似の く人選を、こさおろしてゐると、 會に頑張つてゐて、今の世に時め りにぎやかに、あの高齢まで生き 場君のやうに頻位が高く、いつも ぬものでもあるまいけれども、式 夏宏平さんなる法、歌が現代的 の人では、なかなが人が寄りつい 一本調子で、おまけに淋しい氣機 て來るあでない。そこへ行は 中央に格別名声も無い人が、田 **専幅も聞く、最後まで、かな**

の方は、あの時間つた敏集が果し 同じものを何部でも買っておきた んなものがあるならば、私などは ないかとさく密しられる。もし子 に、種んだ宝になってあるの。 とによれば、空荷街かの棚の隅 て変れ切れたものか、どうか。こ

こんな一風たから「康星一楼的帖

おるは一種のことでは、

その中に ほんの一一声ここに紹介してみる い。これは実し残念であるから、 にも、よく親しぎれてあないらし 砂」の内容は、案外この地方の人 きまだきを感に馬のいななく こちたくも豊が降るらしこの災 **復頃に置い松がたくさんあるが**

馬生の風吹き落ちて樹の後の霞

至つて平凡に見えるかもしれぬが だけの人には、何の変でつも無く 阻いてゐるのに、ひびきの方も、 この中に、実場の作も趣跡もある なかなか、このくらるに欧を飲み を買って勝いるを仕事にしてある とをせずに、金を捕つて人の歌集 所かに評価がある。自分で作るこ よく調子がとれてあて、そして何 らしいが、復襲がくつきりと行き 子食むとかなかでねよう子 四降の夜うらの板橋狐兆で泣く を折々乳児の泣く声きこの さいべの木宗もろむけふぶく夜 ち方省三世婦できるの 散りみだる湖沿ひの村 露晴れて日影まばゆき人在町を なかひにいる荒消の色 だき原こゆればはろはろとま

> するので、何十年歌を歌*んだな* かない。 どいつてもなかくうまく行 りも、作る人の無特に動きがな ない。これは、技術よりも何い 睨んで見て、少しも何がうつら なかみがたつぶりしてあても、 やうに歌んであるのは、いくら うに、思くすると取つけにした それが少しもない。話がここま で來ると解らぬ人が多いであら がたいのは、こうどうとしたぎ 事や別景をするに、とかく知れ それから、かうした細やかな包 叙事でも叙版でも、 べやうに、つめ込むや

そこのところが、相当しつまく行 ものでないのに、玄場君の歌は、 來るらしく、ながくうまく行く これは練習よりも、生れつきから

の俳句の方と、両方を受けてある

それが日本野歌の本質だといふや

うなことを云つたものだが、その

たどられる。それが式場若の歌い はつきりと、それらしいものが、 とあく、玄場若自身の集中に 二つの傳統といふことは私の方は する時には、よく、秋泉沿人は、 る。た芸場名は、私の歌系批評 って、ほかの機会を待つことにす あるが、それらのことは、個く智 た、恋笑のうたなどに、いいのが

人間Sの万間S優続と、監視で

一番大きい特色かも知れぬ。 は、この集い原稿を、何分よろ 京歌唱」が出ることになった。 って、勿ち私の第一歌樂の「南 屋の手へ渡す変での間に、どう と動き出して、それがもとにな つと目を超してから、それを本 したはつみか、私も一つ歌集を しくと手許へあつけられて、ず も一つ武場君のこの欧郷に 子見ようといる類指が、 ふ るところもあつたかも知

これらがみなそれである。

若草のを野のふる道こもいづい あが新しき、」」は得さし

若草の野路わけゆけばたとめに 田の中を流るる川の敬稱に君と は曙に野をめぐり祭む

て在り通びけむ君の退任の

それから戦組を極めた描なのう

015

(1九元)に学友とともに同人誌『アダム』を立ち上げた。当時の式場たちが熱狂した『白樺』と

大正六年(1九1七)、式場隆三郎は新潟医学専門学校(現・新潟大学医学部)に入り、大正八年

016



A 5 判A 5 判 A 5 N 19)7月

(表紙複写提供・金沢大学附属図書館・医学図書館)新潟大学学術情報基盤機構附属図書館・医歯学図書館

でオスカー を示す号。彼らが同年秋に出す同人した、同誌の他の号から際立った異色『白樺』の影響を受けて新機軸を期 庭」のカットはフェリックス・ヴァロットン。 訳など二篇を寄稿している。「死の 誌『アダム』の原型である。 校友会誌。隆三郎は「榴散郎」の筆名 編集にあたった新潟医学専門学校の 吉田璋也(二八九八~一九七二)とともに 式場隆三郎(当時の姓は垣沼)が同級の ・ワイルド作「死の庭」の抄

正8年(1919)11月、複写提供・日本近代文学館◆垣沼(式場)隆三郎〔編集・発行〕「アダム」第1号、

る。同人の子息で当時満五歳であった。 紙(図版右)のネコの画は長崎素明によ ダム』創刊の翌年三月に早世[註]。 裏表 よる。小山正太郎の不同舎に学び、『ア 表紙画は寺田英俊(八九〇~一九二〇)に

(昭和二年九月)に、大正六年(1九一七)秋の寺田、[註18]を参照。後述の「藝術時代」第一巻第四号[註1号田の履歴に関しては、本書収録の藤井論考 られていたとも伝えている の下宿の壁面には、多数の西洋絵画の複製が架け 代」という一文がある。このとき寺田と式場は、漱 式場との出会いを回想した渡邊信 、子規、虚子について 太郎「榴散郎時





公演などの文化イベントも手掛けた。後年の式場の多彩な る。彼らは校内での泰西美術複製展覧会や、講演会、声楽 た。式場たちの『アダム』もまた、劉生の表紙画を獲得す いう大正青年のスタイルは、雑誌というメディアを通じ、同志を互いに結び付けている。そのスタ イルは、多く岸田劉生による図案にしるし付けられてい

活動は、この青年期に見事な原型を見出すことができる 乞交換 攻 誌 攻德有

4

彼は低く夢見るやうな聲で云つた。 ヴァデニャの眼差は涙で濕るんで來た。彼女は雨手で顔を被ひ隱した。 ど彼女は囁いた。 月が遠くから見下ろし水松の樹はその巨大の腕を眠れる人々に上に繋げる。」星の如く輝いて、夜鶯がよつびて啼いてゐる。夜鶯は長いこと夜を唄ひ通す。 「あなたは『死の庭』のこと仰言つてるんでせう」 「ずつと遠く松林を越れて …小さい庭がある。其處には鬱葱と茂つた草が生わてゐる。そして罪人參の花が大きな白い 死 0 一篇 0 加 堀 確 兄 庭 1: (オスカ 垣 泗 榴 冷い水晶のやうな 散 郎





場隆三郎旧蔵)

複製画展は『白樺』に倣った挙である。 新潟医学専門学校内で一日限り開催。 機会となり、地元紙も関心を寄せた。 新潟市内では最初期の西洋美術紹介の 『アダム』創刊を記念するイベントとして、

第三年第二号(通巻第五号)も同じ表 残し、この号からは画家の信頼厚かっ の好感の表われとも見られようか。 生は、第三年第一号(通巻第四号)に新 ますます『白樺』に通じ合うものとな ダム社からの、人を介しての依頼であっ 十五日の日記に、「今日池田正治より岸田劉生の大正九年(1九二〇)一月二 紙絵を用いている。[註3] 一九三三)に印刷原版を依頼した。[註2] た木版彫刻師・伊上凡骨(二八七五~ 人は前号までの表紙の刷りに憾みを 同号の編集後記によれば、アダム社同 と手数が増えており、劉生のアダム社へ たな表紙画を描く。先号よりもずっ (通巻第三号)でも用いられた。更に劉 る。この表紙絵は、続く第二年第二号 巻第二号)は、劉生画の表紙を獲得し、 た。こうして『アダム』第二年第一号(通 するつもり」「註一」とある。式場たちア 田舎の雑誌の表紙たのんで来る。承知

> 大正9年(199 A5判 大正9年(1920)2月 「アダム」第2年第1号(通巻第2号)





いては、本書収録の藤井論考[註2]~[註3]を年、二三頁。劉生日記中のアダム社への言及につ年、二三頁。劉生日記中のアダム社への言及につ年、二二頁。劉生日記中のアダム社の書法、岩波書店、一九七九

伊上凡骨」(徳島県文化振興財団・徳島県立文学(朝日新聞社、一九八八年)、盛厚三「木版彫刻師なお伊上凡骨の評伝として、祖田浩」「匠の肖像」 よったという。本書収録の藤井論考[註3]を参照。[註2]凡骨への依頼は、柳宗悦と小泉鐡の仲介に

念日光美術館他、二〇一九年、出品番号五二、迫内、素描礼讃 岸田劉生と木村荘八』(小杉放菴記は、笠間日動美術館が収蔵している。展覧会図録は、笠間日動美術館が収蔵している。展覧会図録書道館、ことのは文庫、二〇二年)がある。 祐司「作品解説」九五頁)





019